

2005年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
 歩き初む子にあらたまの年の日矢
 生え初めし皓歯きらりと初笑
 泣初の子に大いなる未来あり
 幸運を満たす朱塗の盃に屠蘇
 乗初の窓に真白き富士のあり

横浜 川田 田鶴子
 村人の鶴いる限り日々守る
 親子鶴むつむ姿のうるはしき
 鳴き交はし時に帰る鶴の群
 降る雨に藪騒しるき鶴の墓
 明日の餌を用意鶴守帰りゆく

十勝 高田 焔鳥
 冬帝のふるさと十勝統べ給ふ
 十勝野の降りつ吹雪つ暮れにけり
 新巻をさばく力の妻にあり
 短日の灯はなやかに飲み屋街
 極月ののつびきならぬこと多し

十勝 西川 勝仙
 登校の子らに挨拶息白し
 安売りの列に加はり街師走
 冬の夜や一行のみの子のメール
 売られゆく仔牛鳴く声北吹いて
 縄のれん馴染みの顔や師走風

世田谷 山本 静江
 秋の日に栄華を残す守礼之門
 星降る夜風雪の夜へて卒業す
 子に胸を張りて迎へる卒業式

町田 小森 正彦
 冬至日に勝っているよな月出でし
 そこここに電装灯る聖夜かな
 年越しの蕎麦に暖借る東山
 年の夜の道に火流る東山
 新玉の陽光そそぐ京の街

町田 一ノ瀬公儀
 絞め納めとして選ぶ冬ネクタイ
 消防も控へ火高くどんど焼き

相模原 西澤 桃園
 あどけなき巫女より破魔矢授かりし
 初売りの娘囃しや纏振る
 蓬莱といふ橋渡る大旦
 運は神任せなりけり初みくじ
 鳶の音の高く澄みたる初景色

2005年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
 装いの軽くこころのあたたかく
 春光の森のふくらみなりしかな
 下萌の弾み足裏を撥ね返す
 はばたきをひかりにかへて春の鴨
 良きことの待っていさうな暖かさ

十勝 高田 焔鳥
 一夜明け二尺にせまる春の雪
 除雪車の威力まざまざ目のあたり
 わが路地に二尺の春の雪を搔く
 ありがたし妻の雪搔き加勢かな
 降りやめば雪見の酒の楽しみも

相模原 西澤 桃園
 春潮や高速艇の水尾交り
 分け入れば雑木の中に青木の実
 春一番連山の樹々波打てり
 春の潮伊豆南方は海に消え
 春雷の先触れの風湖をわたる

十勝 西川 勝仙
 鏡みて少し派手目の春着かな
 草萌や歩ける足に感謝して
 ふつくらと丘を彩る猫柳
 ほろ苦く酒の肴の蔭の臺
 空蒼く登ってみたき春の山

横浜 川田 田鶴子
 四方より雛仲よく舟に乗す
 声もなく舟音もなし流し雛
 汐に透け沈みし雛の坐ります
 海光の眩しさに雛見失ふ
 雛流し波にたゆたふ小さき笛

町田 小森 正彦
 教室に無言戒あり大試験
 鉛筆の走る音のみ大試験
 場違いの声道を行く大試験
 神官の海に入るや若芽狩り
 眼下なる信貴生駒山花の峰

2005年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
咲ききわめ黒薔薇黒くなりきれず
色に酔ひ香に咽せ薔薇の園真昼
母子像も乙女の像も薔薇囲ひ
薔薇アーチぬけ贅沢な香に憩ふ
色溢れ香りのあふれ薔薇盛り

十勝 高田 焜鳥
二袋百円の花種選ぶ
夢を蒔くごと花の種を蒔く
苗床の手入れや何時の間にお昼
あたたかやポットの苗を日溜りへ
花鉢の手入れに倦みし遅日かな

横浜 川田 田鶴子
コサージの薔薇の香れる花嫁御
シャンデリア灯るロビーに薔薇香る
アンネてふ薔薇に少女を偲びけり
園巡り香るばら茶をいただきぬ
豪華なる薔薇見て庭の小さな薔薇

町田 小森 正彦
海渡る列車の汽笛風薫る
谷下りる藤花の色は白
赤色で始まる芽吹きでありにけり
春昼や亀の甲羅は南向き
二百種類一万本の七変化

2005年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
また違ふいたずらはじめ夏休
母と子のないしよの話夕涼み
還暦のいまだ末っ子墓洗ふ
薬園の白き名札に秋の声
秋の蚊の標的となりゐたるかな

十勝 高田 焜鳥
コロポックル居さうな大き落を刈る
石動(いするぎ)は父のふるさと南吹く
大南風遠き友みな老いにけり
大南風や海兵たりしわが昔
蝦夷きすげ野の夕暮はゆるやかに

横浜 川田 田鶴子
弧をえがく地平線まで麦の秋
挽歌聞こゆ麦畑中の土壌かな
夏帽の小孩守もる群家鴨
上海の夏の夜に酔ふ古典樂
ジャスミン茶飲みつゝ夜景の涼しき灯

町田 小森 正彦
五月雨や女子大キャンパス華やけり
中華街は色失はず五月闇
香水の強き匂ひや街薄暑
60年の余熱残せし原爆忌
「君が代」は忘れてならぬ敗戦忌

2005年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
魚跳ねて潮の香秋を深めをり
深秋や港に日差しありながら
ブルースの聞こえてきさう窓の秋
潮の香の風に色づく丘の秋
仰ぐたび秋空深くなりゆける

相模原 西澤 桃園
竿頭に吊られ一ツ目鳥威し
秋郊や文久四年の道標
蕎麦の花以前菜畑なりしかな
干し柿の軒に吊るして留守の家
山萩の露分くてゆく行者道

横浜 川田 田鶴子
湖に水漬く立枯れ小鳥来る
女の山の簪にも似て茨の実
倒木の幹に沢なる月夜茸
山の日には松虫草の色淡し
幾度か夜霧の襲ふ山の宿

十勝 高田 嶋鳥
新涼の単線列車空いてをり
鳴き兎われに秋声溶岩の屋
足湯して湖の秋風ほしいまま
秋めきし峡深くきてこの秘湯
明日のこと明日にまかせて松手入

町田 小森 正彦
みちのくの緯度ごとにある稲の色
広げたる花弁たたむも華芙蓉
退職を祝ぐ宴席の温め酒
荒夜あけ一段の蟬時雨
新しき眼鏡に代へて秋迎かふ

2005年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
山の日をこぼし時雨をこぼす雲
ゆっくりと日をひるがえし朴落葉
美しく燃へしものより散る紅葉
君の踏む落葉の音につひてゆく
散るもみち残る紅葉に染まりたる

横浜 川田 田鶴子
諭されて帰りゆく娘や十三夜
油染む愛用の櫛一葉忌
下町の櫛屋なつかし一葉忌
菊坂は我が通学路一葉忌
一葉忌紙幣に面輪よみがえる

町田 小森 正彦
唐辛子真っ赤になりて天を突く
秋天に温泉街の湯気消ゆる
秋潮という白波の上を飛ぶ
山間の稲架の高きに日落ちぬ
せせらぎの小石をけりて鴨飛べり